

人に読ませる文章とはどのようなものか。どこに視点を置けばいいのかをテーマに、ジャーナリストで、日本エッセイストクラブ理事長の辰濃和男さんに4回にわたって紹介していただきます。今回は、文章を書くまでの「仕込み」の重要性がテーマです。

## いい文章を書くには「段階」がある。

フィギアスケートの荒川静香さんは、トリノ五輪の直前、曲をツウランドットに変えた。しかも、芸術性の高い表現を取り入れ、採点対象外のイナバウアーの演技も入れた。観客は「技術至上主義」を超えた美しさに沸いた。その熱気が彼女をさらに飛躍させ、審査員の心をとらえた。

私がいいなのは、企画力がいかにものかどうか、ということだ。演技は氷上に立った瞬間から始まるものではない。一年も二年も前から競技は始まっている。大切なのは、たゆまぬ練習だけではない。創造的な企画力、演出力である。

新聞も同じだ。いい新聞を創るには、なによりも、いい文章が大切になる。イキがよくて、びちびちしている記事でにぎわう新聞なら、自然に読む人がふえるし、逆に、無味乾燥な文章が並んでいれば、すぐに捨てられてしまう。

では、いい文章を書くためにはなにを大切

にしたらいだろう。新聞の、とくに特集、コラム、シリーズものなどの場合は、荒川静香さんの場合と同様、創造的な企画力、さらには、取材力がものをいう。

いい記事を生む営みは、机の前に座ったときに始まるのではない。机の前に座ったとき、勝負の六、七割はすでに決まっている。

ある特集記事が生まれる過程を図式的にいうところなる。

①企画。なにを特集の主題にするか。ルポ（探訪記事、調査報道など）の場合は、対象をどこにしぼるかを練る。

②取材。その企画にそって、かかわりのある人にインタビューをする。必要な資料をでさうるかぎりたくさん集める。取材で大切なのは、「現場」に行き、五感を働かせて観察し、綿密に話を聞くことだ。

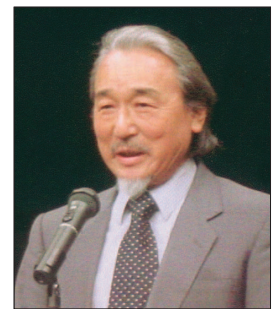
③取捨（まとめ）。集まったデータから、どういう流れの記事を書くかを検討し、なにを取り、なにを捨てるかを決めてゆく。

④執筆。書き直し、さらに書き直し、さらにさらに書き直す。

①②③がうまくいかなければ、④でいくら書き直しを繰り返しても、いい文章にはならない。書くときに必要以上に四苦八苦するのは、企画、取材、取捨に、どこか不十分、不適切などころがあるからだ。そういう時は、もう一度、①②③に戻って、やり直す。

わかりやすい文章を書く。人の心に残る文章を書く。そのためには、机の前で、全精力を注ぎこまなくてはならぬ。しかし、忘れてもらいたくないのは、文章は机上でのみ生まれるものではない、ということだ。学級新聞や学級通信を創る場合でも、①企画、②取材、③取捨、の三段階にきちんと取り組むことがいかに重要かということを力説したい。

④がうまくいかないときは、また①②③に戻ってやり直すことは私たちもよくやることで、それを妥協せずに実行する勇気と根気を持つこと、それが大切だと思っている。



●たつの・かずお  
朝日新聞社入社。ニューヨーク支局長、東京本社社会部次長、編集委員を経て、論説委員。「天声人語」を13年間にわたり執筆。平成6年朝日カルチャーセンター社長を経て、現在著述業。